

手筒花火の迫力を多くの人に伝えたい

旧本川根町の閉町記念行事の際、現在のメンバー数人が手筒花火を初めて体験したんです。その慰労会の席で「自分たちでもやってみたいか」という話が持ち上がりました。その後、静岡市郷島の手筒花火保存会の人たちと知り合いになり、技術や製法などを教わり始めました。

歓声が大きいほど僕らも気合いが入る

手筒花火は必ず自分たちが作ります。作業は個人の責任。一歩間違えば大きなケガをする危険性もありますから製作は気を遣います。もちろん打ち上げ時も気は抜けません。大筒は火薬を詰めて約20キロにもなる。一瞬でも気を抜いたらダメなんです。だからこそ張り合いがあるし面白さもあります。手筒は途中で炎が変化するんですが、そのとき観客から大きな歓声上がるんです。この歓声が大きいほど、僕らも気合いが入るんですね。もっと保存会の活動の場を広げていきたい。小さな祭りなどにも呼んでもらえたらと思います。みんなと町おこしのつもりで始めた手筒です。みんなにその迫力や醍醐味を伝えたいし、やりたいと思う人はぜひ手を挙げて欲しい。そうやって輪が広がっていき、祭りにも町にも活気が生まれれば、こんなにうれしいことはありません。



奥大井煙火保存会
岩崎敏行さん(桑野山)

自分たちが楽しむ気持ちは人に伝染する

太鼓の面白さや楽しさにはまった
わたしが太鼓にかかわったきっかけは、赤石太鼓保存会の発足前にさかのぼります。当時の青年団主催の夏祭りでは太鼓を叩いたんです。人手が足りなくて、やむなく抜擢されたんですが、その経験が大きかった。楽しかったんですね、太鼓が。それから、あちこちの祭りに出向いては太鼓をたたきました。やがて町が「赤石太鼓」を発足させると聞き、自ら志願して保存会に入りました。
赤石太鼓は昭和57年4月、保存会として正式に発足。全国の太鼓保存会を視察し、イメージを固めました。小口大八さんという和太鼓の第一人者と出会い、師事することで、赤石太鼓は今の形に成長しました。
保存会の活動は学生に支えられている部分が大きいですね。小学生から大学生まで、彼らの頑張りにくして赤石太鼓は成り立ちません。
わたしたちは、何より「自分たちが楽しい」から太鼓を演奏しています。そんな気持ちは人に伝染するもの。だからこそ、出演者も来場者も一体となって盛り上がることができるんです。太鼓や祭りを通して、より多くの人を巻き込んで「楽しむ」気持ちを根付かせたいと思っています。



赤石太鼓保存会
中原康夫さん(千頭)

「5年間は続けてみよう」を合い言葉に

お盆に帰省した人が楽しめる場所を
以前、青年団が主催していた「清涼祭」。夏の風物詩でした。やがて青年団がなくなり、その夏祭りも途絶えました。「このままではいけない」と思い、有志で実行委員会を立ち上げました。
メンバーの間では「5年間は続けよう」と申し合っています。継続は大変ですが、来てくれた人が「今年も良いっけよ」なんて言ってくれると、また頑張ろうかと思ってしまいますね。
祭りには、中高生もスタッフとして参加してくれています。するとその友達が遊びに来てくれる。会場で若い子をたくさん見かけるのは、そういった気軽な雰囲気根付いてきているからではないでしょうか。
伝統がある祭りではありません。一言「やめよう」と言えばなくなってしまうのも事実。その一方で、地域を限定せず幅広くやっていけるという面もある。周知方法など課題はありますが、もつといろいろな人に楽しんで欲しいし、一緒につくっていくことができたらと思っています。
「祭りがあるから帰省したい」と言ってもらえるような、子どもたちの思い出に残るような、そんな祭りに育てていけたらと思っています。



やっちゃん祭実行委員会
前田孝一さん(高郷)

男衆が力を合わせて神輿をトラックに乗せている。祭りの舞台裏にはこういった地味な作業に汗を流す人たちが大勢いる。その積み重ねが、祭りを華やかに彩る。



祭りを通して
はぐくまれる
人々の一体感
「喜びの共有」

「祭りには不思議な力があるんです」。夏祭りに参加したある女性は、そんなことを話し始めた。「わたしは子どものころ、太鼓をたたいていました。祭りの当日、法被を着るだけで気持ちが高ぶってきたのを覚えています。ワクワクしちゃうんですね。みんなが笑っていると、なぜだか自分までうれしくなってしまう。そんな祭りの雰囲気大好きなんです」。その女性は、今年もスタッフの一員として、子どもたちに笑顔振りまいていた。
その昔、豊作・豊漁を神に祈り、感謝の気持ちをささげた「祭り」。時代が変わり、その目的が変わっても、人々が集うことには変わりはない。祭りには、華やかな表舞台がある。その一方で、祭りを支える地味な裏側もある。バザーの支度に奔走する女性。司会進行の確認をする役員。神輿作りに汗を流す若者。娘に着付けをするお母さん。丁寧にスタッフの弁当を準備するおばあちゃん。真剣な表情で踊りのおさらいをする子どもたち、それを見守る大人たち……。
祭典当日のたった1日のために、人々は何カ月も前から知恵を出し合い、汗をかき、準備を重ねる。一つの祭りをみんなと一緒に創り上げる。地域が一つになっていく。ときには地域の垣根をも飛び越える。活気と熱気と元氣、そして、喜びを分かち合うために。
そんな「喜びの共有」こそが、現代における「祭り」の本質なのではないだろうか。今回の取材を通して、そんなことを強く思った。
夏祭りが一段落すると、もうすぐ、秋祭りの笛の音が聞こえ始める。

終